連載Ⅰ
あの町この町
第51回

「そこそこ」の哲学――福島県棚倉町

ドイツ文学者・エッセイスト
池内　紀
（イラスト＝著者）

ＪＲ水郡線は郡山を発つと、広い郡山盆地を南に進む。「いわきもりやま」「いわきいしかわ」「いわきたなくら」、そのあとは「ひたちだいご」「ひたちおおみや」「ひたちおおた」と変わり、この路線が旧の磐城と常陸を結んでいることが見てとれる。朝六時台が始発で、つぎが七時十一分、そのあとは二時間おきに一本。ただ常陸太子と水戸間は便数が倍になる。同じ路線でも利用のぐあいが大きくちがうらしい。

その少ない方に揺られていた。目ざす「いわきたなくら」までは五十キロあまり、十二の駅を一時間かけて走る。この程度のスピードが人間にはいちばん心地よいらしく、少し眠いような夢見ごこちにつつまれる。初夏のころで、田も山も一面の緑。ゆるやかな丘陵があらわれるだけで空が広い。農家の白壁と神社の杜。こういった景観は日本人にとって「原風景」にあたるようで、なにやら懐かしい思いがしてくる。わずか東五十キロの海岸の原発事故で、多くの人が町を捨てたなどと想像もつかない。

福島県東白川郡棚倉町。旅好きの友人にたずねても、「たなぐら？」と首をかしげたから、知る人は少ないのだろう。古めかしい駅舎に中年の駅員がひとり。コインロッカーがないとわかり思案していると、よければ預かるとのこと。これ幸いとリュックを預け、手にカメラ一つ。ことのついでに城跡への道をたずねると、「国道を左にすすむと見えてくる」。なるほど、すぐにうっそうとした古木と濠のわきに来た。

棚倉藩六万石。慶長八年（一六〇三）、初代丹羽長重が入ったときは一万石で、二十年後に棚倉城を築いたときは五万石。豊かな土地柄を実証したわけだ。初代が城の完成前に白河へ移り、壁がまだ荒土のままだったので「新土城」と呼ばれたそうだ。

二代目城主に近江の内藤氏が入り、ついで太田氏、松平氏、小笠原氏、井上氏、松平氏、阿部氏とめまぐるしくかわった。お濠の亀が水面に浮くと城主がかわると噂になり、俗に亀ケ城ともいった。そういえばヘンな記述を見かけた。

「失脚譜代大名の左遷地の様相も」（『幕末・維新全藩事典』人文社）

浜松藩主井上正甫は文化十四年（一八一七）、十代城主として棚倉移封を指示されたが、病気と称して浜松を動かず、幕府のお役をやめてまで移動を拒んだ。棚倉城には蛇が多いからイヤだと言ったとか。十二代松平康爵は石見・浜田藩の藩主だったが、密貿易が発覚して毛利家以来の由緒ある土地から棚倉転封を命じられた。その道中は犯罪人扱いで、宿や本陣で宿泊を拒まれ、寺泊りの旅をしたという。「失脚譜代大名の左遷地」といった見方は、このころに定着したらしい。

本丸を囲んで六メートルあまりの土塁、まわりに内濠。かつては土塁の上に多門と呼ばれる長屋のような囲があって、壁に矢、鉄砲を打つ峡間が四百あまり。角櫓は二階式が東西南北に一つずつ、外濠に面して追手門、

北門、南門などがあった。

外濠は埋め立てられたが本丸跡はよく残っていて、土塁の長さ約六百メートル、グルリと一周できる。古木がていていと枝をのばし、眼下は深い濠で、涼しい風が吹いてくる。本丸屋敷跡の古風な建物は図書館だったが、新しくよそにつくられて取り壊しになる。隣合って資料館があったが、3・11の大地震で半壊、ひと足先に撤去された。北寄りがゲートボール場で、老人がひとり黙々と球をころがしている。城内で見かけたのは、この方おひとり。土塁は格好な散歩コースと思えるのだが、ベンチ一つないところを見ると、あまり使われていないらしい。

「昔日の浪漫あふれる城下町」

絵地図に大きく掲げてあって、町のキャッチフレーズのようだ。「豊かな自然と歴史に恵まれた六万石の城下町」「スポーツと文化と健康をテーマにした体験型リゾート地」ともある。

「――さあ〝たなぐら〟で思いっきり深呼吸して下さい」。

西南には八溝山、東は阿武隈高地、郡名に「白川」をもつように水が豊かで、大らかな山河に恵まれ空気がうまい。町には都々古別神社といって日本武尊にまつわる古社が上の宮、中の宮、下の宮と三つあり、おいしい空気と水の地に古くから人が住んできたことが見てとれる。郊外の一つを訪ねるにはタクシーが必要だが、あいにく大きな葬式があって出払っている。町内の詰所のおばさんがテキパキと無線をとばし、一台が会葬のあいまに抜けて来ることになった。

「のんびりした町ですね」

お茶をいただきながら、おしゃべりをした。今年（平成二十四年）現在で、人口一万五千とちょっと、「へりもせずふえもせずというとこ」だそうだ。おばさんによると、「そこそこ」に暮らしていると、暮らしていける。よくわからないが、地道に暮らすということなのだろう。

右・中央やや下に棚倉藩。『大日本行程大繪図』（天保十四年刊）より

「食べ物屋も飲み屋も安いですヨ」

ボッたりは決してしない。利益はそこそこにしてつづけていると、ちゃんと立ちゆく。欲を出す店はつぶれていく。おばさんの目は、小さな町のあり方とモラルを正確に見つめている。

南の郊外の八槻都々古別神社は拝殿、本殿とも雄大で美しい。農の神とされてきて、四百年つづく伝統行事の御田植祭が伝わっている。都々古別三社の中の宮にあたり、ことのついでに西の郊外の上の宮、馬場都々古和気神社に寄ってもらった。唐破風の拝殿が壮麗で、樹齢数百年の大木がまわりを取り巻き、陸奥一ノ宮の風格をただよわせている。

同じ「こわけ」でも、上の宮は古和気、中の宮は古別。そもそも「つこわけ」とはどういう意味か。

「さあ、なんのことですかなァ」

棚倉町・現代エリア

タクシーの運転手は顎を撫でながら、のんびりと答えた。この辺りは「つつこわけ」が神社の本筋だそうだ。

町内には弘法大師ゆかりの山本不動尊をはじめ、宇迦神社、白河国の開拓にかかわる地蔵尊、僧行基が刻んだ観音菩薩をいただく常隆寺、さらに蓮生寺、長久寺、蔵光寺……。城下町におなじみで、寺がちらばっている。「紫衣事件」といって、紫衣着用の勅許をめぐり幕府と朝廷が対立した際、幕府に抗議した玉室和尚が流罪になり、棚倉藩に配流されたときの謫居跡もある。

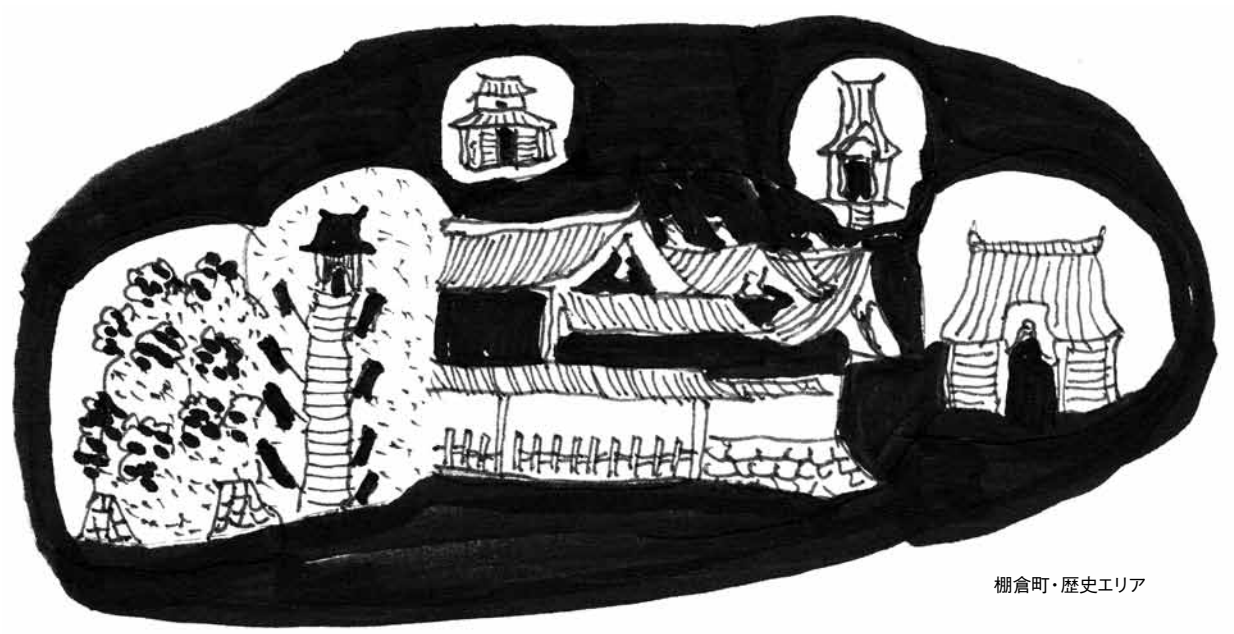
JRの線路をはさんで西側を歴史エリアとすると、東側は現代エリアで、文化センター、総合体育館、町民プールのほか、第三セクターリゾート「ルネサンス棚倉」がゆるやかな丘陵にひろがっている。いわく、「スポーツもカルチャーも保養も研修もすべて引き受ける超多才テーマパーク」。

さしあたり車で一巡したが、おそろしく広い。レストラン、売店をそなえたホテルを中心に、インドア温水プール、クアハウス、野外ステージ、コテージ1号・2号、バンケットルーム、客室、宴会場つき新館パルテノン。乗馬施設は野外コースのほか、八百平方のインドア乗馬コースもそなえている。テニス場はインドアコートを含めて全三十面。人口一万五千規模の町で、はたしてこれだけ巨大な施設を維持できるものか?

「そこそこにやってるようです」

運転手によれば、高校や大学の体育団体が研修、合宿にやってくる。パルテノンでは会議、結婚式、パーティ。ただ乗馬施設は馬に手を焼いている。コースは整備したが、馬の世話までは考えていなかった――。

「ルネサンス」の名づけは共同出資の社名からだが、町としては「再生(ルネサンス)の意味」をこめてのことだろう。リゾートとスポーツ、さらにカルチャーとゴルフとアーチェリーを併合させた。文化センターは「倉美館」といって、目をむくように大きい。レストランで玉どんをいただき、



棚倉町・歴史エリア

クアハウスの湯につかりつつ、六万石城下町と現代版再生システム共存の難しさを思いやった。

十代城主が幕府内の出世を棒に振ってまで棚倉を拒んだのは、遠江浜松からすると、北の陸奥は地の涯のような気がしたのではなかろうか。十二代の松平は、たしかに不祥事で浜田から転封になったが、密貿易は当時、西国・九州の藩はどこもやっていたこと、隠密に見つかったのが不運にすぎない。浜田は六万一千石、そのころの棚倉は六万四百石、禄高もほとんどへらされていないのだ。運を変えるつもりがあったのか、藩主松平は山本不動尊に開運祈願の石灯籠を寄進。そのせいか三代のちの十五代城主のとき、めでたく川越に移った。このとき棚倉の禄高八万四百四十三石。幕末最後の阿部氏は十万石で城主となっている。水ゆたかで丘陵は開拓しやすく、蛇が多いどころか、いろいろな産物のみのる土地なのだ。

その伝統はいまなお脈々と生きており、棚倉町物産振興会発行の「物産ガイドブック」には、「自然と歴史に育まれた自慢の逸品」がつまっている。つぶあんであまみをおさえた玉屋の大福、素材にこだわった甘盛堂のいちご大福、昔なつかしい丸石のおばけせんべい、創業文化年間、伝統の味は久桁屋入野堂の羊羹、ほどよい甘さ、おばまやのまつたけ最中。辛党には今年が創業百年、藤田屋本店の福賑栄、自然の風味そのまま、大木酒店の粕漬。ほかに家伝「つるりん蒟」の小松屋本家、山里の味、金子のじねんじょ、変わり種には日本メグスリノキ本舗謹製、落葉高木メグスリノキを原材料にした健康茶「肝目メグスリノキ茶」。

平和な町だが、幕末は大きく揺れた。水戸で旗上げした天狗党が筑波山にこもったとき、棚倉藩も出兵、八溝山へ逃れてきた残党を西の山間で処刑した。幕府の命令で余儀なくの思いがあったのか、藩主は三界万霊塔を建立して弔った。慶応四年（一八六八）の戊辰戦争にあたり、東北の大半の藩がそうであったように去就に苦慮した。はじめは官軍に兵

を出したが奥羽越列藩同盟が成立するやこれに加わり、白河城を中心にして激しく戦い、多数の死者を出した。ついで官軍の棚倉城総攻撃。城は落ち、周辺の古町を焼失。

しかし、遠い昔ばなしである。城跡の南が旧の町筋で、そこそこの哲学を商いに生かしているのだろう、シャッター街にもならず、昔ながらの店が健在である。どこかで見たことのある建物だと思ったら、川越の「時の鐘」を模したもの。川越市と友好都市を結んだ記念というが、大よろこびで去っていった藩主の移り先と友好を結ぶところがなごやかである。

初夏なのでめだたないが、いたるところに桜の古木が列をつくっている。中世に館のあった公園、棚倉城跡、一里塚に添えられたしだれ桜、所々方々の神社や仏閣、春になると町中が薄紅色に染まるにちがいない。

およそ知られることの少ない町だが、観光ズレしていなくて、観光スポットにあたるところも、ごく自然のままにのこっている。その上で矛盾したことを言うようだが、せめて駅にはコインロッカー、城跡にはベンチ、要所に簡単な道しるべが欲しいものだ。現代エリアの何百分の一かの予算で歴史エリアが活気づき、その活力が「自慢の逸品」にも及ぶのではあるまいか。

車をとめ、自動販売機でジュースを買った若い男女が、ストローでジュースを飲みながら、大きな絵地図を見上げていた。

「ムカシビの……」

男が言いかけ、女性が「セキジツ」と訂正した。

「つぎは?」

「ロマンかな――たぶん」

苦心のキャッチフレーズだろうが、格式が高すぎて、いまの若い人には少々無理なようである。

午後の便で郡山へ出るつもりで早目に駅にもどってきた。預かってもらったリュックのお礼を述べていると、駅員が心配げに空を見上げている。いつのまにか黒雲に覆われていて、やおら大つぶの雨が落ちてきた。たちまちそれが、しのつくような雨になった。

駅舎にいるので、ときならぬ大雨をおもしろがっていると、そんな場合ではないという。今朝早くにもいちど豪雨があって、土が湿っている。線路の冠水と運転中止が心配だ――。

まさかと思った。改札口の上の表示は、電車が一つ手前の駅に着いたことを示していた。あと五分もすればやってくる。しのつく雨とはいえ、これぐらいで運転を止めていたら、のべつ中止になるだろう。たしかにそうだが、棚倉近くは冠水常習地で、どこかがつかったら最後、運転できないという。

電車が来た。雨を払ってとび乗った。心配げに雨を見上げている駅員をのこして、こともなく発車。やみはしないが、ひどくもならない。心配症の駅員さん――と思いかけた矢先、車内放送で運転中止が告げられた。冠水の個所を超スローで通過して、磐城石川駅どまり。JRが用意するタクシーに乗り換えてほしい。

それでわかったが、乗客のうち一般客は四人だけで、あとは通学の高校生だった。中途運休には慣れっこのようで、アナウンスを聞き流しておしゃべりに余念がない。

そんなわけで見知らぬ人とタクシー相乗りで、国道118号を北に走った。おかげで途中に猫啼という奇妙な名前の温泉があるのを知った。相乗りした男性によると、和泉式部のペットにちなむそうだ。木につないでいってしまったので猫がなきつづけ、その木の根かたから湯が湧き出したという。

「ま、たしかなことはわかりませんがネ」

その人は少し上手の母畑温泉が猫啼よりも好きだそうだ。そこそこの旅の終わり、思いがけないことで何やら得をした気分だった。

（いけうち　おさむ）